止むなく友引の日にする時は棺の中にお供の人形を添えてすることもあった。この友引の日をさけることは今なお全国的に継続しているようである。

二　年中行事

1　年　始（一月一日）

年始は俗に「年とりの日」という。歳時記によると、一月を正月と呼ぶのは「正」は「改まる」または「改める」という意味を持っているので「改まる月」ということである。また陰暦異名で睦月というのは一同顔をそろえて睦まじく親しむ月だからという。また、太郎月ともいうがこれは人の子の長男を太郎という習わしからきたもので一月は年の始めの月だからそう呼ばれたものである。

元日は早朝に起出でて朝風呂を浴び、若水で顔を洗い、つまり斎戒沐浴してから、その年の恵方を向き歳徳善神に不老長寿、福徳円満、一家の安全をこめて祈念する。農家ではにわなかに歳徳さんの祭壇を設ける。祭壇は土台に臼をすえ、その上に箕を置き、それに一升枡を立て、餅、密柑、干柿等を重ね花や年とり蕪という大きな蕪か、またになった大根を供えお燈明をともす。お供えの花には松、梅、ゆずり葉（つんの葉）等の枝をさし、松の葉には餅とり粉で白く化粧する。これを雪松という。家族全員が歳徳善神の礼拝をすますと座敷に年長順に座り、新年のあいさつを交してから屠蘇酒を飲む。屠蘇は不老長寿

の薬といわれ、以前はかかりつけの医者へ年末の支払いを終わった時もらっていた。屠蘇は屠蘇延命散といって中国渡来のものであるが、五十二代嵯峨天皇の弘仁年間（八一〇年ごろ）に典薬頭から献上したのが起源とされている。山椒、防風、肉桂皮、桔梗等を調合したもので、絹の袋に入れ、みりんを注いで浸み出したものである。屠蘇酒は大中小三段の盃（土器または漆器）で年長順に飲み始め、全部終わったら最初盃を始めた者に戻し、小さい盃から順に大きな盃を重ねて収める。これは末広がりに縁起したものである。盃の合い間にはするめ、昆布、数の子等を塩につけて肴にやる。数の子は鰊の卵で子孫繁栄を意味する。床の間には松に鶴などめでたい掛物をかけ、松竹梅の生花を置き、三宝に大きな鏡餅を二重ね置く。鏡餅の上には密柑、干柿、鰯等をのせ箸を添えておく。今一つの三宝には手前に広い昆布（これもよろこんぶ、白髪昆布は白髪の生えるまで長生きするように）を垂れ、その上に白米一升を盛って鏡餅の隣りに置く。所によってはこれを「おてかけさん」とか「てがき」「こがけ」等と呼ぶがこの言葉の起こりは不明である。我々の祖先は正月には神々がこの米に宿っていると考え、また大切な米への感謝と今年の豊作を祈ったことから来たものと考えられる。盛上げた米の上部にはだいだいとところと木炭を置き、その周囲には密柑、干柿、栗等を列べておく。これは「代々この所に住む」という縁起によるものである。ところは山芋科の蔓草で「野老」とも書き、葉も山芋に似て大きく根も大きくなるが、正月用のものは「鬼どころ」というものでひげ根が多く食用にはならない。玄関には門松を立て〆縄の中央にも前述のだいだい、ところ、木炭やゆずり葉、裏白（もろもき）等をくくり付け

たり、えびを作ったものなどをさげる。正月に使う植物や食物はもちろん季節のものであるが、ゆずり葉は「ゆずり合う」という謙譲の心を現わすとか、新葉が成長してから旧葉が落ちることから子が親に先立たないという縁起があり、裏白は心の中も純粋純潔、二心など持たぬようにとか、双葉だから「栄える、茂る」という祈りをこめたものであろう。正月に使う箸は「俵箸」とか「くいやぁ箸」といって山から手ごろの栗の枝を伐ってきて、箸の両側を削り昔の米俵のような形のものに作る。これも米が豊作であるようにとか、くいやぁつまりやりくりがよくなるように、経済的に向上する、生計が楽になるようにと祈りを込めたものと思われる。

一通りの屠蘇酒を交す式がすむと鏡餅に向かって「〇〇才になりました」と宣言し、三宝にのせてある密柑、干柿、栗などをいただいて朝の食膳に付く。ご馳走は各家庭様々だが、家族全員が主婦を中心として作ったいろいろのご馳走を食べる。鏡餅を裁ってお雑煮を食べるのが普通である。歳徳善神を拝んでから氏神へ参ったり、恵方参りといって恵方に当たる神社へ参るため遠くへ出かける人もある。第二次世界大戦までは学校で四方拝の儀式が行われ、児童生徒とともに村民も多く参加し

年のはじめのためしとて　　終わりなき世のめでたさを
松竹立ててかどごとに　　祝う今日こそ楽しけれ

と歌っていたが、戦後は家族が中心となり学校の儀式はなくなった。夕方は「節の膳」といって始めて米飯を食べ、夜は早く寝て吉夢を祈った。ラジオやテレビも無かった時代の子どもたちは、男児はこ

ま遊び、女児は羽根つきをし、また、いろはかるたや双六等で楽しく遊んだ。

2　二日商いと鍬入れ

元日はどこの商店もしまっているが、二日は「二日商い」といって大ていの店は商売始めの日とし、大きな商店は新春の大売出しをする。「初荷」と大きく書いた旗を立てた荷馬車が威勢よく活動を開始する。この日、農家では「鍬入れ」といって朝食前に、今年の苗代田を予定した田んぼに、恵方に向かってゆずり葉の小枝をさし込み、今年の豊作を祈願する。ゆずり葉をさす時鍬を使い農家の仕事始めとしたのである。松梅あたりでは酒、塩、魚、米を田の神へ供えたり、お神酒を田にまいたり、ゆずり葉でなく栗の枝や切り初めの樫の枝をさす所もある。また、同地区ではわらを川につけ「かしわら」といい、縄とかおだ等を作る準備をする家もあった。

3　ほんげんぎょう（鬼火）

一月七日、朝まだ暗いうちに起出て、門前や鎮守の境内、村外れ等適当な場所を選んで火をたくがこれを「ほんげんぎょう」という。これは全国的な行事で、鬼火たきというのは鬼退治の意である。昔、宮中では清涼殿の東庭で青竹を連ね立て、扇子や短冊などを結びつけ、それに御吉書を添えて焼いた。これに対し民間では書初めの清書や門松、〆縄等を添えて焼いたのがやや形を変えて残ったものといわれている。子どもたちは前日までに山や土手に行って竹笹を刈り、それを束ねて立てたり小屋を作ったりして、翌日未明にこれに火を点じ、歳徳善神に供えた餅を焼いて食べた。この餅を食べることによっ

て、禍を除き福を得ることを祈った。所によっては小屋の中に前夜から餅や菓子を持寄り、一夜楽しく語り合い、遊んだりして翌朝この小屋に火を点じることもあったが、これは危いので大正時代の末ごろから禁止された。また、点火してから竹竿に吉書を結びつけて燃やし、その灰が空高く上がれば上がるほど手蹟が上達するとされていた。桟敷部落では「鬼」の文字を書いた紙をくべ煙にのせて空へ高くあげるのを競うようである。竹の燃えかすのまだ煙が出ているのを拾って田んぼへさし、虫害除けのまじないにしたり、上部を三角形に折り曲げ門口に立てて魔除にする所もある。

4 初入り

「おはつり」「おはつい」「おのうりゃあ」とかいって、一月七日に親類同志一家こもごも客に招きまた客として行っていたが、次第に七日と限らずその前後にするようになった。また、後には一軒々々を回らず、毎年当事者を決めて一回だけにする「出合ぁのうりゃあ」に切り換えられていった。「のうりゃあ」というのは「直衣」つまり「なおらい」「なおりあい」「なおあい」等のことで今まで正月の神事のため不浄をさけていたのを平常に返すことで、神事が終わって後、神酒、神饌をおろしていただく酒宴またはそのおろした神酒のことをいったものである。後には神事など省略され、単に親類同志の新年宴会のようになった。形式はともあれ、初入りそのものは現在も続けられている所が相当に多い。

5 七雑菜粥

一月七日は七日正月ともいう。前日、野菜や山菜を七種とりそろえ、これを洗ってゆで、まな板の上

において、右手にほうちょうを刃を上にして持ち、左手には杓子を持って、

「七くさなずなを積み上げて　正月七日のたたきな　ジャンジャン」　とか

「唐土の鳥と日本の鳥は　七くさなずなを積み寄せて
かち合うてバタバタ、　やい方なしい　といかた　といかた」

などお家繁昌を祈る呪文を唱えながら雑菜を叩き、それを布でしぼって青汁を皿にとる。一日以後爪を切ることを禁じられていたがこの七くさの汁を爪に塗ることによって八日以後は爪を切ることが解禁されたのである。こうしておけば日を嫌うことなく何時でも自由に爪を切ることができるといわれた。なお、七種はいわゆる春の七草でせり、なずな、ごぎょう、はこべら、ほとけのざ、すずな、すずしろであったが、この辺ではこの七草でなく何でもよいから七種類さえあればよいとされている。

6 七福神

これも一月七日の行事でこれは町内でも少数の部落で行われた。部落の青年や子どもたちが七福神装束をして、その部落はもちろん他の部落まで回って各戸に「七福神のはいり」と唱えて、七福神の所作ごとを演じた。その家の幸運を祈り、かつお祝いのことだからどこの家もこれに対し、餅をやったりお祝儀を包んでその好意に報いた。現在でも柚ノ木、福島、川上各部落の一部で行われている。また、この日の夜煎豆をまいて「鬼は外福は内」と唱える所もあったがこれは後に節分の日だけになった。

7　荒神餅

一月九日の朝は荒神さんに供えた餅を焼いて食べる。この餅はへっつい（かまど）を模して作った餅で、所によっては男性に忌まれもっぱら女性専用の餅であった。つまり男性が台所くさくなってはいけないということであろう。これは今も存続されている所が相当に多い。

8　土龍打ち

土龍打ちは一月十四日に行う男児の行事である。ころのよい五、六メートルの雌竹を切ってきて、その先にわらずとをくくり付けたもので、部落の各戸ごとに庭先に円陣を作り、もぐら打ちの歌に合わせて地面を叩くのである。すんだらそれを各自持ち帰ってわらずとの付近から折り曲げて自宅の柿の枝にぶらさげておく。土龍打ちをしてもらった家は、土龍打をしてくれた子供達の家族内の子どもの数だけ小餅をやるので、兄弟姉妹の多い所はたくさんの餅をもらったものである。この行事はもともと田畑を荒すもぐらの害を除こうとするものであったが、次の歌詞のように果樹の豊産を祈ることに変わったようである。また一説には新しく来た嫁を祝う行事ともいわれ、竹の棒を男性のシンボルとし、それで嫁の尻を叩くと早くみごもるという意味もあったという。現在でも出羽、小川、久留間、今山、今古賀あたりで行われている。次に土龍打ちの歌を掲げておく。（　）内は註釈

なれなれ　柿の木（実をたくさん結べ）　ならずの木をば（実を結ばない木を）　なれぞというた
千なれ万なれ　億万なれ　つる落ちすんな　空花咲くな　人のちぎっときゃ（人が盗みとる

時は）　ほい（堀）の岸いなれ（堀の中ぁなれともいう）　おどんがちぎっときゃ　畑のまん中ぁなれ　去年よりゃ今年ぁ　所見がようして（見ばえがよくて）　太うして長うして
ぶらぶらっとなれ　十四日のもぐら打ち

9　二十日正月

一月二十日は「二十日正月」といい、忌明（正月に喪に服し年とり行事をしない）の者、または九才、十九才、二十九才等年なみの悪い者などは今一度越年の式をあげる。この日は年始ほどのものではなく極めて簡素で形式的なものである。

10　此月流し

二月の初午講の日に少女等は糸柳の枝に大麦、かんな草および自分の髪を少し切りとって白紙に包み水引で結んで

この川やこの川や広さ深さは知らねども　流るる先まで延べや黒髪　延べや黒髪　とか、
この川やこの川や長さ深さは知らねども　流しし先まで延べや黒髪　髪長うなれ長うなれ

など唱えて流れ川の橋頭から流す風習があった。また、髪の代りに木炭を紙に包んで流し、流したらうしろを振向かないで走って家に帰るという所もあった。

11　針供養

もともと十二月八日と二月八日の二回していたがいつの間にか二月八日だけになった。明治のころま

では裁縫師匠の家で、この日針子たちが晴れ着で集まり五目飯などを作った。一年間使用して折れた裁縫用の針を白い豆腐にさし、淡島様の祭壇を設け、草花や菓子等を供えて針へ感謝するとともに裁縫の上達や針でけがをしないようにと祈った。この日一日は針を納め仕事を休んでいた。以前は学校でも女児だけでこの行事をし運針競技などをしていた。

12　粉搗き十五日（ねはん会）

二月十五日は米や麦をいって粉をひき、砂糖や干柿の皮の乾燥したものを小さく砕いて入れたり、もち米をもみのまま焼いて「米の花」とか「飯花」というものを作って混ぜた。この粉のことを「こうせん」とか「こうばし」という。井手部落あたりでは「ごうへらし」といっている。そして「つけ木」（薄い板様の木片の両端に硫黄をぬり火をたきつけるもの）を切って作ったさじですくって食べた。これはもともと仏教関係の行事で釈尊が沙羅双樹（印度原産のりゅうのうこう科の常緑喬木）の下でねはんに入寂するのを祭り、不生不滅の解脱の境を求める行事といわれ、子どもたちはこの日、おしゃべりをしないで口をつつしむようにと言い聞かされていた。柚ノ木、久池井、川上部落等の一部にまだ存続されている。

13　ひなまつり

三月三日で「桃節句」とか「ひな節句」といって、ひな人形を飾り、ふつ餅（よもぎを入れてついた草餅）を供え、「桃酒」といって白酒を入れたかんびんに桃の花枝をさして飲み少女の将来を祝う。特に

初節句の所は近隣や親類知人等からひな人形、ぼんぼり等やお祝儀をもらい、酒肴を出して盛大に祝う。又流行病よけのためにタニシを煮て食べる家もあった。

14　灌仏会

四月八日は釈尊の誕生日として「甘茶とり」とか「花祭り」といっている所もある。各寺院では、すみれ、たんぽぽ、菜の花、れんげ草等春の草花できれいに飾りつけた「華堂」を作り、その前に大きなたらいを置いて甘茶を入れ、その中に「天上天下、唯我独尊」の釈尊像を立て、参拝者はお塞銭をあげ、その甘茶を釈尊像にかけて礼拝し、甘茶をもらって帰る。家族の者は全部これをいただいて病厄よりのがれるように祈るのである。また、甘茶を蚊帳に吹きかけると虫よけ、屋敷の周囲にまくとまむしよけになるといわれている。西野、平野、川上、五領、下都渡城、尼寺、屋形所、井手等では存続されている。甘茶はゆきのした科の落葉灌木であじさいに似た花をつける。華堂は摩耶夫人が無憂樹の下で釈尊を生んだという花園を形取ったものであり、甘茶はこの時九頭の竜が天から清浄な水をはいて、産湯を使わせたという伝説に基づくものである。

15　川の神祭り

四月二十八日で九州各地で行われ、「河童祭り」とか「川祭り」ともいわれ、大和町では「川ん神さんまつい」と呼んでいる。わらや小縄で円座のようなものを作り、一本の竹の上部を三つに割ってこれを支え、それを川や堀に立てたり川に流したりする。円座のような物の上には小旗を立て、野菜、果物、御

供飯（ごっくうさんという）を供え、お灯明にろうそくを立てる。また、白紙に鮒、鯉、なまずなどの川魚や茄子、胡瓜、南瓜等の野菜を墨書したものをはりつける。これは川や堀などに落ちこまないようにという祈りであり、また日常使用している川や堀への感謝、川魚を捕って食べるので川魚の霊をまつる等種々の意味があるようである。三反田、上梅野、横馬場、川上等の一部に存続している。

16　端午の節句

五月五日で、元来中国の端午節を昔の貴族がとり入れたもので、武者人形や鯉幟を立てるようになったのは江戸時代以後である。軍陣に用いる吹き流しを、端午の節句に立てるのが江戸の武家屋敷で流行になり、これを見た町人達がそれではこちらも威勢のいいところをと立てたのが鯉幟の始めである。ひな祭りが女児の祝いであるのに対し、これは男児の祝いで、男児が始めて生まれた家ではお節句の数日前から庭先に十メートル以上もあるような柱を何本も立て、これに矢車、吹き流し、鯉幟を立てた。陽光に映ゆる若葉をバックにいらかに躍る鯉幟は「鯉のぼりここにも日本男児あり」の句のとおり男児にふさわしい威勢のいいもので、初節句の家では酒を用意し、親類知人や近所の人を招いて振舞いをする。鯉幟には武者絵といって昔の歴史上の人物中の英雄豪傑やお伽話の主人公などが大きく染め抜かれているのが普通である。ひな祭りや端午の節句は現在もほとんど日本中に存続されているが鯉幟を立てる場所がない所では室内用小型の飾り物の鯉幟を立てているようである。昭和二十三年七月に国民の祝日に関する法律が制定され、この日を「子どもの日」とし、「子どもの人格を重んじ、子どもの幸福

をはかるとともに母に感謝する」という日になった。

17　菖蒲湯

五月六日で菖蒲は尚武（武をたっとぶ）に通じるものであり、五月四日菖蒲の葉とよもぎをくくって軒先にさしておき、六日には「六日の菖蒲」といってこれを小さく割き鉢巻をして風呂に入る。湯の中にも菖蒲の葉を入れてそのかおりを賞でるのであるが、菖蒲鉢巻は頭痛をさけ、よもぎは魔よけになると伝えられている。よもぎが魔よけになることについて古老は次のように話してくれた。

『昔、ある所に夫婦者が住んでいたが、その嫁さんの方は非常にいやしんぼうで、今夜二人で食べようと楽しみにしていたご馳走を夫が野良仕事に出ている間に一人でこっそり食べてしまった。仕事を終えて帰宅した夫はいっしょにご馳走を食べようと膳についた途端、嫁の方は猛烈な腹痛を起こし苦しみ出した。夫は嫁の腹をさすりながら、お前が一人で食べてしまったからその天罰だといったような意味を含めたおまじないを唱えた。すると忽ち嫁は大きな蜘蛛に変化し、夫を一呑みにしようと襲いかかってきた。夫の方はびっくり仰天、家の外にとび出し野道を一目散に逃げた。蜘蛛になった嫁は大きな口をあけ物凄い形相をして追かけてくる。もう逃げられないとあきらめた夫は立止ってふと道端を見たところ、そこにはたくさんのよもぎが生い茂っている。夫はそのよもぎの茂みの中にすばやく身を隠した。蜘蛛はそれとは知らず通り過ぎて行ってしまったので一命が助った。蜘蛛になった嫁は永久に帰ってこなかった』

18　さかもり（春祈禱）

四月の末ごろから五月の始めごろにかけてこの行事が行われた。普通は順番に当事者をきめて行われたが、若者組では新婚の者や長男が生まれた家が臨時に当事者になった。酒宴は二三日から長い時は一週間にもわたる盛大なもので、打上げの日は村の主婦たちが仮装行列をし、音曲を奏し歌や踊りでにぎやかに繰り出した。また、この日部落の子どもたちには「たけのこ握り飯」を振舞うので大変な騒ぎであった。この行事は、農家ではこれからいよいよ麦刈りや田植えが始まり、一年中で最も多忙で骨折る時期でこれを「ごんがつ」といい、そのごんがつに備えるための体力作りであったらしい。もちろん、春祈禱だから昔は五穀豊穣を祈ったものだったが、いつの間にか単なる酒宴のみとなり昭和の初めごろまで続いた。今山部落では打上げの日に「しいど流し」といって川さらえをし大饗宴の幕を閉じたという。

今山部落には次のような「さかもりの唄」が歌われていた。

○酒でさかもりやたびたびござるのー　お茶でさかもりゃ今が初のー
○シャンス（相思の人）持つなら北から持ちゃれ　たとえ来んてちゃきたとなる
○竹に虎とは昔のことよ　今の若衆は鍋にだらのー（料理屋で飲食する遊蕩児）

19　さなぼり（早苗祭）

「さなぶり、さなぼい、さのぼり、さなぶい」ともいう。山手の部落では「おいたて」ともいってい

る。七月上旬ごろで本来は田の神が田植えの終了を見届けて帰り上がる日であるといわれている。農家ではいちばん骨折る田植えが終わり、無事すんだというお祝いで各家庭でご馳走を作り慰労をするものである。この日はもち米の粉であんこ入りの饅頭を作るが、その饅頭を蒸す時は、山から「まんじゅうしば」という円形の葉っぱを採ってきて饅頭の下に敷く。饅頭は近隣へも配る。また、農家の新嫁はこの日から里帰りをする所もあった。

20　七夕祭り

七月七日を「たなばた」という。七夕は棚機つ女（たなばたつめ）の略である。この日は天界のけん牛（鷲座のアルタイル）と織女（琴座のベーガ）という星が天の河（銀河）で相会するという中国伝来の風習で全国的になっている。前日から「七夕饅頭」という麦饅頭を作り果物等を添えて供えた。七日は未明に起き出てて里芋の葉の露の滴水をとり集めて墨をすり、五色の短冊に自分の願いごとなどを書いて竹の枝にくくりつけた竹竿を門先に立てる。また、女児は裁縫の上達を祈るため、色がみで着物やはかまなどを裁ち竿のいちばん上部にそれをつける。七夕に使用した竹竿は畑に立てて虫よけにしたり、物干竿にした。昭和になってからは小学校等で学級の行事として集団的に実施するようになり各家庭ではあまりしなくなった。この行事は陰暦の七月七日であるが、今は七月七日や八月七日に行う所が多い。

21　盆祭り

陰暦七月十三日の夜十二時から十五日の朝までの三日間にわたり、日本中の国民的行事として行われ

ているが、現今は新暦の七月十三日や八月十三日から行う所が多いようである。

これは仏教の仏説孟蘭盆教に基因するもので、釈尊の弟子の目蓮尊者が、死んだ母親が餓鬼道で逆さまにかかって苦しんでいるのを救おうとして釈尊に教えを乞い、七月十五日に大供養法会を営み、ついにその回行の努力によって母親を救ったことによると伝えられている。その倒懸の原語が「ウランバナ」でそれが「ウラボン」となり、さらに「ボン」となったといい、我が国では六五五年ごろ中国から伝来したという。お盆に入る一週間くらい前から「門提灯」といって縁先に提灯を下げ灯をともして西方十万億土からはるばる旅をしてこられる「お精霊さん」(仏さん)をお迎えする。お盆前には墓地の清掃、墓地への道路の清掃修理、お寺や家庭の仏壇の清掃や仏壇作り等に多忙が続く。仏壇に供える花は一定はしていないが、いわゆる盆花といって桔梗、おみなえし、はぎ、山ゆり、花しば等を用いる。また、川からまこもを刈ってきて乾かしてからむしろを編んで仏壇に敷き、位牌は蓮の葉の上にすえる。宗旨によって異なるが十三日夜のお茶とうから始まって十五日朝の餅で終わる。その間朝、昼、晩季節のものを精進料理にして供える。料理を供える時、「供じょうろさん」とか「餓鬼じょうろさん」とかいって先祖の仏様と区別し、器に入れないで里芋の葉などに盛って供え、取り下げてからもこれを食べることが忌まれるので捨ててしまう。これはつまり無縁仏でまつってくれる人のいない精霊がまぎれこんでくるものと考えられ、盆踊りも精霊を慰める意とこれらの無縁仏を追出すということで始まったともいわれ、精霊流しも同様の意味からだという。檀那寺の僧は盆経をあげてまわる。十四日と十五日の夕方

は墓地へ行き、提灯をつけ線香をあげて家族そろって参る。親類縁者の仏には、そーめん、ろうそく、線香等をあげて参りに行く。初盆の家には親類知人等が美しい提灯等を贈り、美麗な祭壇を設け、近隣の人も参って故人をしのぶ。十五日夜は「精霊流し」といって小さな舟を造りお供物をのせ、ろうそくをともして川へ流し、精霊を十万億土の極楽へ送った。また、十六日は「藪入り」といって一般に休日とし、この日は地獄の釜もふたを開けたまま休むといわれ風呂をわかさない所もあった。盆踊りは空也上人の念仏踊りが変化したものと伝えられている。これは戦後急に盛んになり、婦人会や青年団を中心として部落や町でも行われるようになったが、これは仏教的な行事としてよりもレクリエーションとして行われているようである。「盆正月」といえば多忙を代表する意味で、日本人の二大国民行事であり、戦前までは医療費なども盆と歳の暮の二回に支払うのが通例であった。

町内某宅のお盆のお供物は次のとおりである。

十三日夜＝だんご、お茶(七回)。十四日朝＝飯、梅干、豆腐、南瓜、茄子、油揚げのみそ汁、豆、奈良漬。十四日昼＝うどん又はそーめん。十四日夜＝飯、なます、煮しめ、(こうや豆腐、こんにゃく、ごぼう、里芋、昆布)。十五日朝＝餅。十五日昼＝うどん又はそーめん。十五日夜＝飯、焼酎又は酒、冬瓜のハチハチ(なます)、根芋のみそ汁、けんちん汁、きんぴらごぼう、豆、ひゅうのごまあえ。

※ 中元

正月十五日を上元、十二月十五日を下元と呼ぶのに対して七月十五日を中元という。合わせて三元と

称し、これを贖罪の日として、金品を捧げて罪滅しをすることになっていた。中でも最も重んじたのは七月十五日の中元で、この日縁故者や取引関係の間で贈答するようになった。この呼び方は中国の暦から学んだものであるが、満月のころを見計って神祭の期日にする習慣は日本でも古くからあった。中元というのは本来このような祭り日をさしていたのであるが、今ではその時の贈り物の意味に使われるようになってしまった。正月前の贈り物を歳暮ということに対し、これは盆歳暮とか盆供とも呼んでいた。中元の贈り物はうどん、そーめん、白米、米粉菓子、果物等が主であったが、今では衣料、はきもの、日用品等幅広くなっている。

※　盆綱引き

大久保部落その他数部落で盆行事として行われていた。男の子たちが部落の各戸から「すぐりわら」なら小手三束、「しびわら」なら大手一束（小手三十束分）わらのない所はそれに相当する金をもらい集め、しびわらはきれいに下葉を落し、それを直径三センチくらいに束ね直し、十三日の夕方から部落の青年男子に頼んで直径二十センチ、長さ七、八十メートルにも及ぶ綱を夜遅くまでかかって編んでもらった。青年たちは浴衣の肩はだを脱ぎねじり鉢巻をしめ、三人が一組になって「よいさよいさ」と掛け声をかけて編んだ。子どもたちは小束を取ってやったり、蚊を追ったりした。青年から「盆綱の毛むしりを借ってこい」といわれ、あっちこっちを走り回って借りにいくが「ありゃー、たった今まであったばってん〇〇さんがたぁ貸したけんそこさい行ってみろ」とか「うちのはこわれて使われんばってん〇〇さ

んのもっとんさん」などいわれ、からかわれているとも知らず無心に走り回ったものである。綱は部落の中心の道路上におかれ、子どもたちは古賀別などで二手に分かれ、太鼓の合図で一生けんめいにひいた。大人も出て応援したり子どもといっしょになってひいたりしていともなごやかな風景であった。この行事も本来は信仰に発したものであり、神意をうらなう方法の一つであった。海と里のあるような部落では海と里との二手に分かれ、海の方が勝てば豊漁、里方が勝てば豊作といったようなことからおこったという。

22　灯つけ

村の鎮守の夏祭りは祇園と呼び、この行事は青年男子が担当した。鎮守の境内には守護神の外に地蔵尊、観音、大日如来、弘法大師、日蓮等いろいろの神仏がまつってあり、また部落の外れなどにも六地蔵、念仏塔、馬頭観世音等がまつってあり、これらの守護神以外の神仏の祭りは灯つけといって男児の担当であった。各戸から豆や金等を喜捨してもらい、昼間に清掃して夜参拝してもらう。参拝者には煮豆や菓子をやる。主神には「ごう菓子」といって豪華な米粉製の菓子を供えた。参拝者がすんだころを見計って大将と呼ばれる年長者宅に集まり豆や菓子等を分配して解散した。ごう菓子は大将とその下の「手下」までしかもらえなかった。神仏に供える提灯は初盆をした家からもらってきたり、部落備品のご神燈を借りてきた。この行事は戦時中一時中止されたが現在はまた復活している部落もある。

23 祇園（夏祭り）

一般に祇園といえば祇園会の略で、京都の八坂神社の祭礼のことをいうが、この辺では村の鎮守の夏祭りのことを祇園と呼んでいる。もともとこの祭りは水神信仰から来たものといわれている。この行事は青年男子の担当で、各戸から寄付を集めお神酒やお供えをあげ、ご神燈をたくさんつけて盛大に行った。参拝者にはお神酒や菓子等をやり、各家庭ではご馳走を作り親類縁者に振舞った。お宮の境内では仮舞台を設けて芝居や舞踊をし、参道には出店が立ち列び、子どもたちにとっては最高の楽しみであった。第二次世界大戦に入るや、この行事も統制され、今までのように部落個々に実施せず、川上地区は九月三日に定められ、松梅、春日地区では一定せず、中止している部落もある。今もこの祇園祭りはあるが、村の青年も少ないので古賀まわしに当番をきめ、部落全体で行い、往年のような親類への振舞いや催し物等はほとんど見られなくなった。

※ 天井花

祇園祭りの前夜、青年たちがお堂に集まり遅くまでかかって作る。一メートルくらいの竹ひごを作りこれに五色の紙でテープを作って巻きつけたり、桜の造花を緑のテープで巻きつけた美しいもので、祭りの当日お堂の天井にさしてお経をあげ、翌日これを各戸に配布する。各家庭ではこれを座敷内の壁ぎわに高くさしておく。これは家内安全、一家繁栄を祈願するものであるが、悪夢とされている浮立の夢を見た時はこの天井花を見ると何事もないといわれている。現在も東山田、今山、西山田、大久保、横

馬場等に存続している。

24 おくんち（供日）

おくんちは村の鎮守の秋祭りで豊年に対する感謝祭といえよう。おくんちの起源についてははっきりしないが、佐賀県では室町の大永年間（一五二一ごろ）に発生したといわれている。九月九日のことを「お九日」といい氏神の秋祭りをする所もあり、九日を供日とか宮日とかに当てている。やはり中国の九月九日の重陽の節句から変わったものだろうといわれている。時期は地方により異なるが県内ではほとんど行われ、伊万里や唐津のおくんちは全国的に知られている。大和町では川上地区が十月十五日、春日地区が十一月十五日、松梅地区は十月十七日（変わることもある）となっている。神社では下の宮を仮設し、前夜深更御神幸の式を行い神輿を下の宮に安置して終夜護衛し、祭礼の当日午後上の宮へ御遷幸の式を行い、神輿を神殿に奉遷し、参詣人は神輿の下をくぐって一家繁栄、家内安全を祈るのが通例であった。氏子の家では氏子以外の親類を招いて饗応した。氏神には新米で作った甘酒とご供飯（ごっくうさん）をあげ、またそれを家に持ち帰って家族全員でいただいた。おくんちには「鮒のくぐい」とか「鮒のこぶまき」といって、堤や堀等から捕ってきた鮒に昆布を巻きつけ、大根、里芋、ごぼう、蓮根等の野菜とともに長時間煮たものなどのご馳走を出した。

※ おくんち市

おくんちの前夜は尼寺や中極の町すじで市が立つ。県内外の商人たちが集って陶器類、そうけ等の農

具から日用品、食料品、玩具類まで道の両側に列び、おすなおおすなの人出で殊に陶器商のせり売りなど威勢のいいものであった。遠い山間部から出てきた人は塩鯨や塩魚など来年の市まで持ち続けるほど大量に買い込んだという。男の子たちはこの市で買った独楽でしばらくは夢中になって遊んだ。おくんち市は現在も続けられているが店数も少なく往年ほど盛んではない。

25　秋祭り

供日とは異なり氏子中集って鎮守の祭りを行う。大ていの部落では祭田と称して昔からお宮に所属する田地があり、氏子共同で米を作りその初穂を神にあげ自分たちも食べる。大きい部落では古賀に分かれて当番をきめ、朝飯から夕食まで酒宴が続く。朝夕には全員参加する所もある。朝食は赤飯に鰯、夕食には五目飯、汁物等が普通であった。

26　荒神さんずもう

十二月二十四日、村の男の子たち（主に小学生）が集って、むしろを持ちながら各戸ごとに、庭中にむしろを敷いてすもうをとって回る。各家庭では荒神さんの神棚にごっくうさん三個とお賽銭をあげておく。すもうをとり終わると子どもたちは、ごっくうさん二個とお賽銭をもらって帰る。全戸回ってしまうと一軒の家に集まり、もらったごっくうさんをおかゆにして食べる。このおかゆの中に銅貨を入れてすくった者がもらってよいことになっている。この行事は今も吉富、大久保、平田、水上、江熊野等に存続している。

27　歳末、家児揃い

一年もいよいよ押し詰り十二月二十五日になると「しゃあまつ」といって仏の供養をするが、僧侶を招くような法事ではなく、部落内の親類同志が各戸回しに呼んだり呼ばれたりして簡単な精進料理ですます。これは一年間無事に命長らえたことを先祖に感謝し、親類同志の忘年会を兼ねたようなものだろうか。これも次第に廃れたり、各戸ごとにしないで一度に会して簡略にしている所もある。

このころになると正月の準備に忙がしく、餅つきやら正月用品の買物やら「すす払い」という年末の大掃除やらで回される。すす払いはもと十二月十三日に神棚を始め家の中を掃除していたが今は一定していない。また、大晦日の晩は「家児ぞれえ」といって一家揃って膳につく。平素より少しご馳走を作り菊がらをたいてその煙で貧乏神を追出し、俵箸のけずりくずをたいて繰合の向上を祈り、また「運そば」といって来年もよい運にめぐり会うようにそばを食べ、百八ぼんのうをつき鳴らす除夜の鐘を聞いてから寝につく。

28　餅搗き

年の瀬も押迫ると各部落では思い思いに組を作って正月の餅をつく。二十九日は「苦」に通じるためか一般にはこの日をさけた。門先に大臼をすえ、五六人の壮青年たちが向こう鉢巻をして小さなきねでつき、つき上がりには「わーっ」と喊声をあげまことに威勢のいいものであった。女の人はつきあがった餅をまるめて配りつける。大家では四～五俵の餅をついた。

29　その他

(1)　彦山まいり

豊前（福岡県）の英彦山に長途の参詣をするのを「彦山まいり」といった。これは三、四月ごろの農閑期に行われ、汽車を利用する者は往路田代駅で下車し、付近の景勝地または他の神社仏閣にも回礼して彦山に詣で、帰途は遠回りして汽車で帰るのが普通であった。彦山での宿泊は主として帰依の坊跡を尋ねるのを例とした。下山の際は彦山名物の飯杓子、ぞうり、土製の鈴等を買って帰り仲間に配った。この参詣のための経費作りには、権現講というものを組織し、毎年抽せんをして順次四、五名が参詣した。帰宅すれば権現講を開き、明年の参詣者の抽せんをした。彦山まいりに主人を送り出した留守家族の者はひたすら謹慎し、けがあやまちなく無事帰宅するよう仏壇に灯明をあげて祈った。土産にもらった鈴は玄関の入口の上に飾り一家の安全を祈り魔よけにした。最近は参詣の方法等は変わったが、福田、横馬場、池ノ上、平野、出羽、春日、久池井、北原、井手ノ口、下田、広坂、有ノ木等ではまだ存続されている。

(2)　三夜待

これは大和町のほとんどの部落で今も行われている。毎月の二十三日を中心としてその前後に参加者の家を順に当番制で集まるが、昔のような宗教的な意義はなく単なる親睦会となっている。「まち」というのは古語で「まつり」のことである。三夜待は二十三夜の尊、月読命、あるいは三日月様と呼ばれる

神々をまつるということで、当事者は前の当事者から渡された三夜様の像の掛軸を床の間にかける。普通、三夜待の神は女神だから男がまつり、六夜待は男神だから女がまつるといわれている。二十三日の月の出を待って、部落の街道すじにある二十三夜の石碑の前にむしろを敷き、古賀うちの人が酒肴を持参して先ず神に捧げ、おさがりをいただいて四方山話に花を咲かせたという。また、一説には六夜待ができなかった場合、翌月の二十三夜に月待ちをしたので「代待」といっていたともいう。

(3)　六夜待

男の三夜待に対して主婦たちが毎月の二十六日の夜、順番に当番をきめて集まる。大部落では古賀別にしているようである。これは野菜のあえものとか煮豆とかお茶菓子程度の簡単なものが普通のようである。これも本来は陰暦の正月と九月の二十六夜の月の出には弥勒三尊が現われるというので月待ちをしたことから起こったものであるが現在は親睦の程度である。一説には、この二十六日は怪盗石川五右衛門が生まれた日で、この日懐妊しないように主婦たちが集まり徹夜して四方山話にふけり、朝空が白みかけてから帰宅したともいう。

(4)　お日待

毎年十一月十四日に行われる祭で、三夜待が月の祭であることに対してこれは太陽神に対する祭でこの日は太陽に休んでもらうということらしい。これは三夜待ほどのご馳走もなく、また男女の区別もなく一戸から一人出席し、酒肴はなく夕食（もとは中食）を共にし、あとは憩いの時間となったのである

が、この祭はほとんど廃れて今は見られないようである。

(5) 彼岸ごもりと遍路

彼岸は春分と秋分の日を中心としてその前後三日間ずつ合わせて一週間をさしていう。彼岸という言葉は仏典から出たもので梵語の波羅密多の漢訳でくわしくは「到彼岸」という。つまり迷いの此の岸（現実の生死という苦悩の世界）から悟りの彼の岸（理想の涅槃の世界）にいたることである。一週間にわたる彼岸会のことで印度や中国にはなく日本独得のものである。彼岸には墓地の清掃をして墓参をする。また、餅やおはぎ、だんご等を作って親類の仏前へ供えたり、近隣へは野菜のあえ物や煮豆などを配ったりする。この彼岸中は「彼岸ごもり」といって、部落のお宮の堂などに集まり、先祖をしのび感謝するもので主として一家の主婦が出席する。各自お茶や茶菓子、野菜のあえもの等を持ち寄り四方山話をする。この彼岸中に遍路が隊を組んで部落のお宮などへ巡ってくる。遍路というのはもともと弘法大師修行の遺跡といわれる四国八十八ヶ所の霊場を祈願のため巡る人のことであるが、この四国八十八ヶ所は遠隔の地であるため行きにくいので日本のあちこちに八十八ヶ所の霊場（札所）を設け、これで代行するわけでこの辺でも佐賀郡市一帯に八十八ヶ所を定め、巡路、宿泊地を定めて行脚をしている。遍路の列は法螺貝を吹きながら部落に入ってくる。遍路は遍路笠をかぶり同行二人と墨書した白い法被をかけ、胸には八十八ヶ所に供する札箱を下げ「おぶっしょ」という袋に米を入れ、それをお賽銭代りにあげる。参詣が終わると部落の太子講仲間の人が用意したお茶、お握り、おはぎ等の接待をしたり、マッチなど

を配ったりする。最近も行われているが参列者も往年ほど多くはない。

(6) おとう夜

とうやは「燈夜」又は「常夜」で九月三十日の神渡し（神送り）燈夜、十月三十日の神受け（迎え）燈夜、氏神に弁財天を祀ってある所では「みの日燈夜」、十二月の冬至の夜の「冬至燈夜」など種々ある。夕食後鎮守のお堂等へ部落の人が集まり、お燈明を上げて祈り、お茶やお茶うけ等を持ち寄って一夜を明かす。陰暦十月は神無月といって各地の神々が縁結びの相談のため出雲に神集いされるという伝えや田の神が里へ降りてきていたが稲の収穫もすんで守護の任務が終わったので、山へ帰って山の神となるのでそれを送るためとも伝えられている。町内でも数部落存続されているが徹夜するような所は見られない。

(7) 観音講

そもそもの起こりは法華経第八巻第二十五品の普門品の別称で、観世音菩薩の功徳・妙力を説いたお経を観音経といい、その観音経を講じる法会とか、観世音を信仰する者の講中のことを観音講といい、宗教的な行事であったが、現在存続されているのは婦女子の親睦会である。年に一、二回程度で期日も一定せず、経費を出し合い料理も自分たちの手で作り、親しい仲間ばかりだから話もはずむ。なお、女の子も観音講をしているがこれは夕食を共にする程度である。

(8) もーし講

部落の男児が適当な組を作って一か所に集まり経費を出し合って食事を共にする。都渡城の乙文珠宮の例祭が十二月二十五日に行われ、この日使い古した筆を持って参詣すると、祈願をこめた新しい筆と交換してくれるので、子どもたちはそろって参拝し、帰宅後ご馳走を食べたものである。また、乙文珠宮は「もいっさん」と呼んで親しまれているが、乙文珠宮は文珠菩薩を本尊とする神社である。文珠は知恵を授けてくれると信ぜられ、学問の神ということから、少しでもそれにあやかろうとして始まったもののようである。

(9) 風祭り

九月は二百十日や二百二十日といって、台風が日本に上陸し猛威を振い易い季節で、ちょうどこのころは中稲の開花期に当たるので農家の厄日とされている。そこで、この台風が避けて通ってくれるように部落の者が鎮守のお堂などに集って燈明や線香、供物をあげ、鉦や太鼓を鳴らし念仏を唱和して祈願をこめるもので、これは全国的な行事のようである。各家庭からお茶やお茶うけ等を持ち寄り、祈願の休みや終了後の団らんに食べる。大和町でもこの行事の存続している部落は多いが、福島、広坂、有ノ木等のようにこの日中原町の綾部八幡へ参拝して祈願する所もある。

(10) 大般若

大般若は「大般若波羅密多経」の略語である。「般若波羅密」とは「智慧到彼岸」ということで、この義を説いた諸教典を集成した大般若経は全部で六百巻から成り、般若（智慧）よりみれば万有は吾人

のみるような実有のものではなく皆空無想であるという大乗仏教の根本思想を説いたものである。凡俗にはわかりかねる教義だが、この六百巻を全部部落へ運んできて、数人の僧侶が全部これを読みあげるのである。これは部落のお宮やお寺などで催され、部落人はこぞって参詣し、一人一人低頭してお経をあげてもらう。その日留守の者はその人の着物を持って行きそれにお経をあげてもらった。これはその人の健康を祈り病厄からのがれるのを念じるものである。昔は百巻ずつ入った経箱を屈強の若者たちが寺から部落まで天秤棒でかついで運び、途中でおろして休むことは禁じられていたが最近はトラックで運ばれている。この大般若は毎年一月と五月の二回行われるが、法華宗と真宗では実施しない。現在も大願寺、大久保、五領、東山田など相当数の部落で行われているが往年ほどの参詣者は見られない。

(11) 百万遍

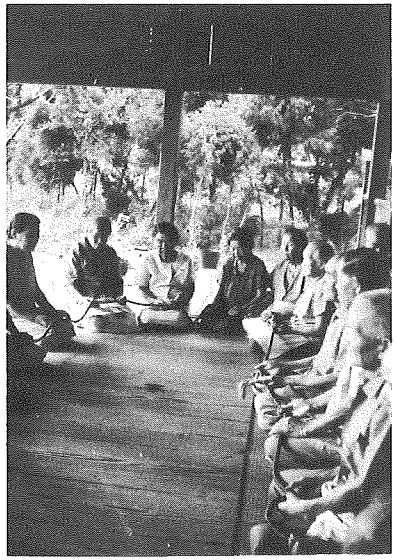
これは現在池の上や久留間部落で行われている行事で県下でも数少ないもののひとつである。池上では毎年七月二十八日から八月二十八日までの約一か月にわたって行われるが、その間盆の三日間は休む。部落の六十五才以上の男女が氏神の天満宮に集まり、部落民の安全と五穀豊穣を祈願するものである。京都市にある知恩寺のことを俗に百万遍というが、この寺は僧円仁の創立と伝えられ、始め加茂明神の神宮寺で今出川にあり、一時法然が住んでいて加茂河原院とも呼ばれた。法然の弟子の源智がそのあとをついで知恩寺と改称し、以来源智門下の僧が住持していた。元弘元年（一三三一）八世の空円が百万

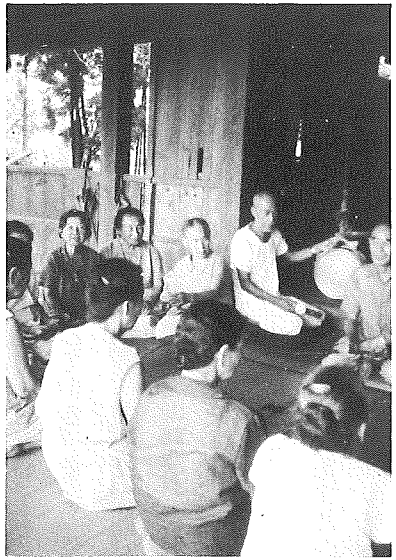
遍の念仏を修めて悪疫をなおしたので、後醍醐天皇から百万遍の号を受けて勅願寺となった。寛文二年（一六六二）に今出川から今の京都市左京区田中門前町に移転した。毎年四月大珠数を百万遍回わす御忌回が行われている。

池上部落の百万遍は永渕喜六氏・江頭繁六氏らの話によると約百五十年前から続けられているという。一人が鉦を叩き、他の人は輪になって座り、千八十個の珠のついた大珠数をひざの上に捧げ持ち「なむまいだいほう」と唱えながらゆっくり回す。珠数が一回りすると今度は少し早目に回し、もう一回ゆっくり回して一区切りとなり小休止する。珠数のつぎ目の房が自分の前にくるとその房をていねいに拝む。こうして一日に三回の祈願があり、休みの時は各小路から持ち寄ったお茶やお茶うけをいただきながら四方山話に花を咲かせたり囲碁や将棋等で楽しむ。本来珠数は印度のバラモン教で使用したものを大乗仏教に取り入れたもので、中国では隋・唐以後盛んに使用され広く仏教徒の間に用いられるようになった。一般に珠の数は百八個とか、その半数の五十四個等であるが、これは除夜の鐘と同様に百八の煩悩を断つことを表わしている。大珠数も恐らくこういう意味からそれを十倍して千八十個にしたものであろう。

午後五時ごろに一日の祈願を終わり、蜩の声を聞きながら家路に着く。一か月の祈願が終わると慰労会をし、来年の再会を約して解散する。

また、久留間で行われているのも趣旨は同じだが、ここは年寄りの希望者約二十名が部落の天神さんに


百万遍（池上）


百万遍（池上）

集まり、毎年七月二十五日の天神祭りの日から八月七日までの二週間にわたり祈願する。

中間に中仕上げといって村から西瓜などを出して慰労し、最終日は仕上げの日で夕食を共にして散会する。

(12) その他

四十坊部落では毎年五月部落行事として「おひたち」というのがある。麦刈りや田植え等いわゆる「ごんがつ」という農繁期を控えての元気付けの宴で青年男子のみが行っていた。楮原部落では毎年八月二十三日部落行事として「ご来光さん」というのがあり、弁財天山に登り提灯をともし、神酒をいただきながらご来光を待つというもので現在も続けられている。井手ノ口部落では毎年六月二日に部落行事として「芽立ち切り」を行っていた。これは夏山の仕事初めの儀ともいうべき行事らしい。朝早く起き出

てて露を踏みながら山草を刈り、三荷ほど刈ってからあとぼた餅などで祝う。現在は部落行事としてはないが各家庭で自由に行われている。また、昭和の初期ごろまでたいていの家庭で行われていたものに「こうじ断ち」というのがある。毎月二十四日の朝食の際、こうじを使った食物、つまりみそしょう油などを一切使わず、梅干とかごま塩だけで朝食をすました。これは火事を出さぬよう火の神へ精進潔斎して祈願をしたものという。その他太子講、お題もっこ、真宗のお講、星祭りなど今も存続しているものも相当に多い。

三　伝説・民話

伝説や民話は昔から口によって話し伝えられたもので世界中どこにでもあるものであるが、話す人が適当に加除したり、創作を入れたりするので、伝承の間に変形したり、また同一と思われるものが国や地方によってその土地の気候風土や民族・習慣等に適するように巧みに作りかえられているのも多いようである。伝説には種類が多い。巨木、石、水界等の自然に関するもの、神様、英雄、動物の化身、人柱等の神仏や人間に関するもの、河童、竜蛇、雷、魚類、獣類等想像物を含めて動物に関するもの、その他、穴、民間の信仰関係のもの、宗教的縁起に関するもの、呪咀的なもの、俚諺を説明したものなど多岐にわたっている。また、歴史的なものではどれだけが史実でどれだけが伝説なのか区別のつきにくいのもある。以下大和町にある主な伝説をあげてみよう。

1　川上たけると真手（大願寺）

第十三代景行天皇の第二皇子日本武尊は始め御名を小碓尊といっておられた。このころ筑紫（福岡県）を根拠地にして北部九州地方をおびやかしていた熊襲という豪族がいた。九州全土を征服して各地の穴ぐらに陣を張っていたが、その威勢に恐れて誰一人刃向う者がいない。そこで天皇は皇子小碓尊に熊襲征伐を命じられた。これが西紀八十二年十二月でこれを平定するまでには凡そ六年間かかったという。小碓尊は英智と武勇にすぐれた方で、弟の彦王を大将とし武内宿祢を補佐役として筑紫の穴ぐらの本陣を攻めことごとく平げたが、その時、頭の熊襲たけるはいち早くどこかへ逃げ去ってしまった。あとで、川上へ逃げ込んだというわさがあったので、尊は筑紫から舟に乗って肥前の堀江（神野町）に一たん寄港してから、さらに舟を蛎久まで進めここで上陸され、熊襲残党の隠れ場所をひそかに確められた。そのころ大願寺の山中で里の娘たちを大ぜいかり集め大酒宴を張っている者があり、それが熊襲であることがわかった。智謀にたけた尊は女に変装し、夜陰に乗じて里の娘たちの中へまぎれこまれたが誰も気付かない。尊は家来たちに酒をつぎながらも熊襲の頭から目を放さず、次第に酔いが回って座が崩れかかったころには、高枕でうつらうつら眠り始めた。ころはよしとばかり尊は「起きよ、熊襲っ」と叫びざま枕をけとばされた。はっと目をさました頭は上半身を起こして「何やつだ」と叫び、あわてて枕もとの太刀に手を伸ばした。それを取らせてなるものかとさっと一太刀浴びせて